

Ⅷ 大阪の都市居住：長屋、市街地住宅、タワーマンション等多彩な住まい

近世大阪を象徴する住まいでは町家と長屋が知られている。都心では、商業と住居の機能を両立した町家が沿道に軒を連ね、その周囲には都市型住宅としての長屋がひしめくように建っていた。長屋のほとんどは借家で、大家がまとめて建設したため、その街並みは整然としていたことが知られている。

近代に入ると、大阪は、工業都市・商業都市として大膨張を遂げる。地方部からの人口流入が激しくなり、住宅不足は深刻さを極めるようになる。こうしたなか、大正から昭和にかけて、都市部とその周辺部では、田園地帯を区画整理するなどして、近代長屋が供給された。この時代の長屋は近世のそれとは異なり、コンパクトながらも凝った意匠と瀟洒な構えを備えた中流階級向けの都市型住宅として人気があった。同じ頃、独立した住居としてではなく、水回りなどは共用するアパートメントハウス（通称アパート）といった形態も生まれた。また、救貧や衛生対策といった社会問題に対応するべく、不良住宅地区改良事業や市営貸付住宅といった先駆的な事業も行われていた。

一方、郊外では阪急・阪神・南海・近鉄・京阪といった民間鉄道会社、土地会社による郊外別荘地・住宅地開発が進んだ。度重なる空襲によって致命的なダメージを受けた大阪は、戦後闇市とバラック、仮設住宅、転用住宅で急場をしのぎつつ、徐々に復興をとげてゆく。民間の住宅供給が進まないなか、戦後の復興期、不足する住宅供給は公営住宅をはじめとする公的住宅から先行して行われた。この頃から鉄筋コンクリート住宅が量産されるようになっていく。

1950年頃には、いわゆる公営住宅、公団住宅、公庫住宅という住宅政策の3本柱が出そろい、人口急増のなか不足する住宅供給が進められていく。郊外での住宅供給とともに、都市部では、高層住宅や店舗、事務所、公営市場との併設が行われた市街地住宅などが供給された。こうした時代を象徴する建築として都市型住宅としての[西長堀アパート](#)（1958年：日本住宅公団）がある。東京都に建設された晴海アパート（1958年：前川國男）と対をなす都心高層住宅の試みとして当時から話題になった。外観は住宅然としておらずシャープな印象をもち、店舗や倉庫が併設され、かつ単身者や家族向けなど、多様な間取りが取り入れられていた。当時最先端の住宅として人気があり、作家の司馬遼太郎や下着デザイナーの鴨居羊子らが住んでいたことでも知られている。

こうした先進的な取り組みの一方で、残念ながら住宅不足の解消には至らず、借家層を対象にしていわゆる文化住宅や木賃アパートが供給されるようになる。そして、それ

らが基盤未整備の市街地に密集した、いわゆる木賃密集市街地が形成された。その後、高度経済成長期には、いわゆる大規模住宅団地や郊外ニュータウンの形成など住宅供給の多様化が進み、現代に至っている。

近年は、都市居住を巡る動きには大きな変化が起ころうとしている。人口減少や高齢化社会の到来、地価の落ち着きとともに、都心回帰が進んでいる。駅前や都心のタワーマンションをはじめ、都心に再び住宅を供給する動きが本格化してきている。こうした流れのなか、リノベーションやコンバージョンによる個性ある住宅の供給も広がりを見せており、船場では、近代建築のファサードを残して、新たに高層マンションとして生まれ変わった、[グランサンクタス淀屋橋](#)（旧大阪農工銀行、1918年：辰野・片岡建築事務所）など、街並みや建築の価値を生かした試みも進んでいる。都心・郊外、様々な住宅形式、多様化するニーズに対応した都市型居住のかたちはこれからも個性ある試みを生み出していくだろう。（嘉名光市）

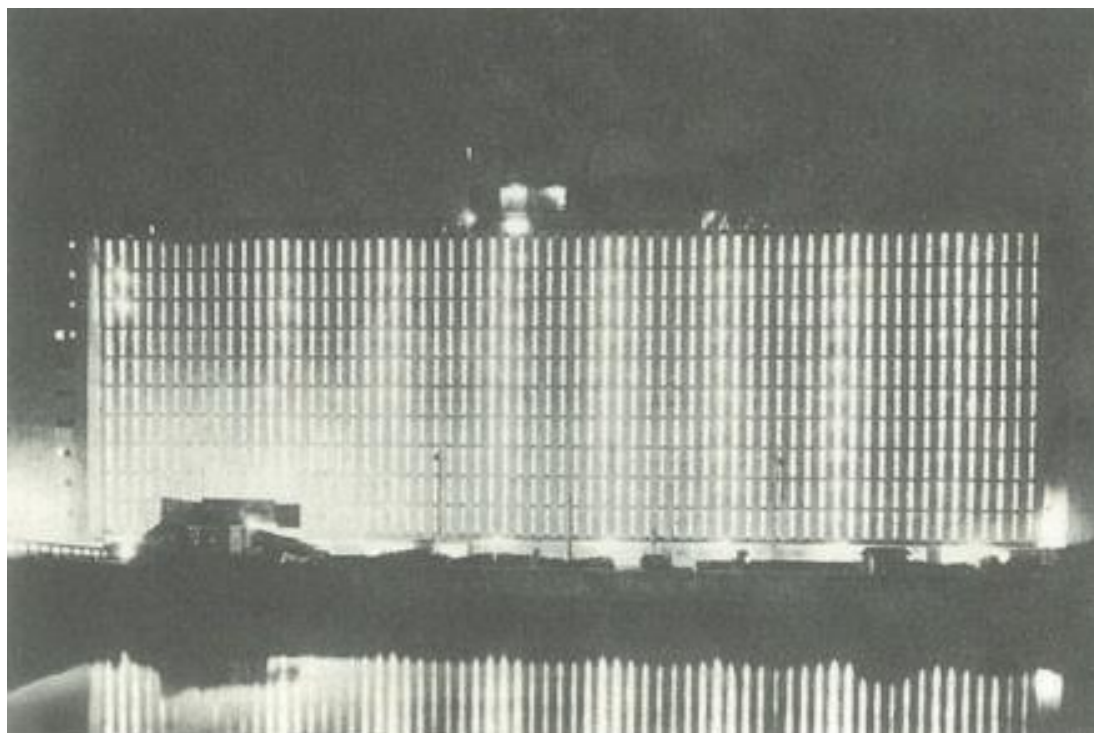


写真 西長堀アパート
（出所 『建築と社会』1960年11月号「公共住宅15年」）